

にいかた

北から南から

と

教壇に復帰して

二十年

中村 加代子

講師裁判（公立小・中学校教諭たる地位確認請求事件）の原告として六年にわたる裁判闘争の後、一九七五年四月一日に復職し、二〇年がすぎました。坂東克彦弁護士をはじめとする弁護団の方々、「公判闘争励ます会」に結集した大勢の人達、臨時教員制度と闘う全国の仲間を支えられての裁判闘争でした。私がこの中で得たのは、展望を持って闘えば正しいことは必ず道が開けること。多くの良心的な人たちによって、この国の民主主義がようやく守られているという確信でした。本当に多くの人との出会いがありました。

このことは私が教師として教壇に復帰して

からの実践の大きな柱となったのです。

この二〇年間のんな教え子との日々がありました。いつも職場の同僚、友人、家族に支えられ、助けられて進んできました。

長岡に初めて情緒障害児学級が開設され、三年間担任しました。かなり重度な自閉的傾向を持つA子。母親は疲れはてていました。

発育も良く、かなり肥満。彼女とは歩いた歩いた。学級の裁園で作ったネズミのシッポのようなサツマイモをたくさん食べて、重度の便秘に苦しむ彼女の大きなウンチ、今でも覚えています。歯の痛みも訴えられず、歯ぐきにはしをつきさしているA子を見て歯科医院を訪れました。その後大病院で全身麻酔で治療してもらうことができました。

中学校が校内暴力で荒れた時期、担任が家庭訪問すると木刀で襲いかかるB男。同じ学年部だった私は、母親をノイローゼにはさせまいと、学校が終わるとB男宅へ。母親と台所で取りとめない話をしていると、気持の落ち着いたB男は、風呂から上がりクローラーのよく効いた部屋でTVを。そんな日々には我が家の長女も爆発。「私達とB君とどっちがかわいい



の」これに参りました。夜間定時制高校勤務の夫と帰りの遅い私に子どもたちもさみしかったのでしよう。思わず抱きしめてB男のことを話してやりました。

母親が若い男の人と家出し、大人のいやな面をいっぱい見てきたC子。「大人って、きつたねえ」が口ぐせで荒れていました。荒れはますますエスカレート。ようやく探しあてたC子は、またいつもの口ぐせ。「世の中、きたないと思う大人もいるかもしれない。けれど世の中、そういう人ばかりでないよ。まんざら捨てたものではないよ」と裁判闘争で出会った大勢の方達の話をしました。そのうちに聞くC子も話す私も涙をポロポロ。この時も彼女を強く抱きしめてしまいました。

継母とうまくいかずアパート暮らしのD男。学校を休んでばかりいるので朝の迎えに。起こしても出てこないのがアパートの階段の下に座って待っていると、「困るなあ、他の生徒が授業してもらえねえろ」その彼も数年前私を偶然見つけて「先生!!」と大声で。彼の乗ったトラックには自分の家の鉄工所の名前が書いてありました。

中学校三年間断続的に不登校を続けて卒業したE男。卒業後も時々訪ねて話をしています。映画「学校」も友人と見にきてくれました。二年間の「こもり」の後、年賀状に小さなうすい文字で「先生、ぼく高校へ行きたい」と。その彼も今は定時制高校へ通学し、昼は土木作業員。先日の「コーヒーブレイクの会」の夏合宿（不登校を考える会）に来てくれて、自分の体験をトットツと語ってくれました。「どんな時子どもは死にたいと思うかわかりますか」と私たちをドキッとさせるような事を言うE男です。人とかかわり続けることの大切さを私に教えてくれた子どもたちです。

現在の私は新教組長岡支部の副委員長として四年目です。今までに新教組本部の副執行委員長選挙、執行委員長選挙に二回立候補し全県を歩きました。この時も裁判をわが事として応援してくれた方達に支えられ、心に残る大勢の方との出会いがありました。裁判闘争を支えてくれた多くの方に今の私の元気な姿をお伝えし、お礼を申し上げたいと思います。

(なかむらかよこ 長岡中学校教員)